

ポスドク研究者、大学院博士後期課程学生等国際学会派遣プログラム	
An Ethical Approach to Hisamatsu Shin'ichi: The Way of Tea as an Example	
氏名 大持 ほのか	比較社会文化学専攻
期間	2018年8月12日～2018年8月21日
学会・分科会名	The 24 th World Congress of Philosophy (第24回世界哲学会議) The Depth of Human Becoming and Transformation: Views from Japanese Philosophy and Philosophy of Education
場所	China National Convention Center, Beijing, China
発表者名、 発表形式	Honoka Omochi, パネルディスカッション (口頭発表)

内容報告

1. 学会・分科会の概要

世界哲学会議 (World Congress of Philosophy, 以下 WCP) は、哲学系諸学会国際連合 (Fédération internationale de Sociétés de Philosophie, FISP) が主催する哲学研究者の国際会議である。1900年に第1回の会議がフランス (パリ) で開催されて以来、5年に一度開催されている。第24回となる今回の会議は、中国 (北京) にて開催され、121の国・地域から約6000人が参加した。なお、当初の会場は北京大学であったが、その後 China National Convention Center (CNCC) へと変更になった。WCPの主な目的は、i) 世界中の研究者同士の交流の促進 ii) 哲学教育の普及 iii) 現代のグローバルな問題への哲学の寄与である。

筆者は、国際日本哲学会 (International Association of Japanese Philosophy, 以下 IAJP) による8つの Society Session の内の1つで発表した。“The Depth of Human Becoming and Transformation: Views from Japanese Philosophy and Philosophy of Education” というテーマで、パネルディスカッションを行なった。IAJPは、2014年に“The Journal of Japanese Philosophy” (SUNY Pressより出版) の編集者らによって創設された。国際的な場での発表などを通して、思想分野における日本哲学の位置付けや意義を、積極的に海外へ発信している学会である。

2. 発表内容の概要

本発表では、西田幾多郎 (1870-1945) の弟子であり、近代日本を代表する思想家の一人である久松真一 (1889-1980) を取り上げ、倫理的観点からその思想を考察・検討した。久松は、宗教哲学者の他にも禅者や茶人としての顔を持ち、FAS協会¹や心茶会²といった団体を創立し、あらゆる人々が禅や茶道を实践できる場を提供した。

2.1 背景・意義・目的

従来の研究では、久松真一の思想は宗教的あるいは哲学的観点に基づき論じられてきたが、倫理的観点から論じられることはほとんどなかった。数少ない倫理関連の先行研究では、久松思想における倫理的観点の不十分さに対する一部の学者からの指摘に対する反論にとどまり、あまり展開されていないのが現状である。その背景には、久松が宗教、とりわけ禅により自覚される「無相の自己」³をその思想の中核として重視したことがある。

宗教的観点より久松の思想を説く場合は、人間は如何なる存在なのか、真のあり方とは何かということが問題となっており、久松のいうところの「無相の自己」について説かれることとなる。禅では公案や坐禅などの手法を用いて、これを自覚する。また、哲学的観点から論じられる場合は、その無相の自己がどのような構造で成り立つものなのかを、西洋哲学や西田哲学の例を用いて論じられる。

しかしながら、久松が目指した思想のあり方とは、決してその観念的理解、あるいは彼の言葉を借りれば「覚める」に止まるものではなく、むしろそこから現実世界に関与していくべきものである。図1に示したように、久松思想では無相の自己を踏まえた上で、社会・人類のために働いていく必要があり、ここに倫理的な視点が見られる。

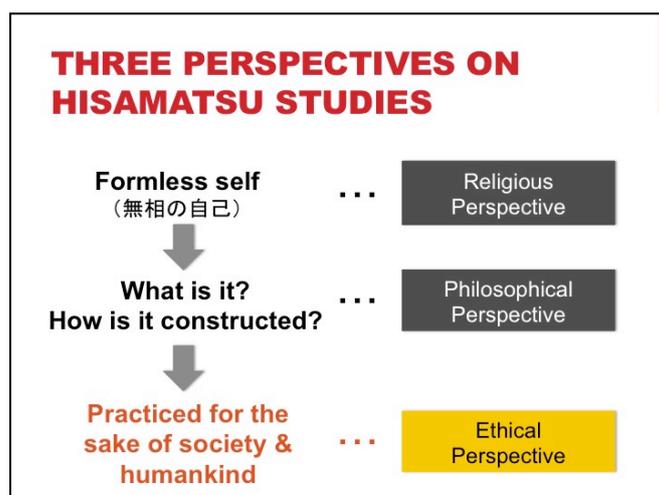


図1 久松研究における三つの観点

久松思想の持つ倫理性は、彼の禅修行に現れてくることは勿論であるが、更に多くの人が具体的かつ実践的に日々行うことができる茶道において、顕著に現れていると考えられる。久松自身も、禅と茶道を一体不二のものとして扱い、日常生活において実践していた。

したがって、本発表では、久松の禅および茶道観を倫理的観点から見直すことにより、彼の思想が持つ倫理的意義を明らかにし、その思想を総合的に捉えることを目的とする。

2.2 研究成果

久松の FAS 禅および心茶会での実践を事例に、彼の思想にどのような倫理的意義が見出せるかを考察した結果、以下の三点が明らかとなった。

i) 禅により自覚された無相の自己は、全人類の根底を成すものであるが故に普遍性を持ち、それに基づき、一人一人が集合して構成された共同体には自ずと平等性という特徴が現れていた。

ii) 無相の自己は自覚後、自由自在な形へと表現されなければならない、そこに各人における差異が生じる。そこで、共同体としての立場に適った個人が生じてくる場合もあるとして、和による共同体を見出し、そこから差異を乗り越えて皆が共存していくあり方を提示した。

iii) 無相の自己に基づく一個人としてのあり方が重要であると同時に、一つの共同体としてのあり方もまた必要不可欠な方向性である。

以上のような人間あるいは共同体の理念的なあり方は、理論として受け入れるのみならず、我々が日常的に実践していくべきものとして認識される。そこで、FAS 協会での禅修行や、日常生活全体を無相の自己で貫いているとされる茶道を通じて、平等性や和といった倫理的特徴を学び、再び日々の生活へと生かしていくことが求められる。つまり、すでに禅や茶道において構想されている理念的な共同体に見出される倫理性を取り入れた、人間の根本としてのあり方を体現したコミュニティ形成がなされることとなり、そこに久松思想の倫理的意義が見出されると考える。

3. 本学会発表の意義

今回の WCP での発表は、自身の研究対象である久松真一の思想を更に深めるだけでなく、現代社会において本研究がどのように寄与し得るかを考える良い機会となった。特に、参加者から頂いた質問や指摘は、今後博士論文を執筆する上で大変参考になった。本パネル参加者の多くは、テーマでもある「人間形成」がどのように実践の場で活かすことができるのか、という点に関心があったようだ。例えば、発表後の質疑応答では、参加者の一人から「人間形成の問題について、ジェンダーの視点から見た場合はどうだろうか」という質問があった。本研究は、久松思想が現代社会にも適用し得る倫理観を持つことを示したが、ジェンダー問題、教育現場や社会問題などに対して、如何にこの倫理性を活かすことができるのか、更に検討する必要があるだろう。

筆者にとって、初めての海外学会であったが、海外の研究者との交流を通じて、グローバルな視点から日本思想を捉え直すことの重要性を再認識した。また、パネルのテーマに関心を持つ研究者も多く、IAJP のように国際的な場へと積極的に発信することは、今後研究を続けていく上で必要だろう。

今後の予定としては、本学の『人間文化創成科学論叢』第 21 巻において、本発表内容を踏まえた論文の投稿を考えている。

4. 謝辞

国際学会派遣プログラムのご支援を頂き、WCP にパネル発表者の一人として参加するという、大変貴重な機会を頂くことができました。グローバルリーダーシップ研究所の皆様、ご指導を賜った先生方に心より感謝申し上げます。

注

1. 学問および実践としての禅を修する場として、1944年に京都大学学道道場の名称で始まる。対象を一般人へと広げるに伴い、学道道場と名を改める。さらに、久松自身の海外体験がきっかけとなり、世界中の人へと視野を広げ、最終的にFAS協会と名付けられる。
2. 1941年に発足した「京都大学心茶会」は、学生から頼まれたことをきっかけに、久松は指導教官として、裏千家家元・淡々斎は点前稽古の指導者として携わっていた団体である。久松は、この茶道の会を「心茶会」と名付け、自身が考えた「茶道箴」及び「茶道小箴」、そして「京大心茶会清規」を提示し、彼独自の茶道論を書き記した。その後、1956年に「心茶会」に名を改め、大学に止まらず全国へと活動の場を広げた。久松が亡くなってからも変わらずに行われ、2008年からは「一般社団法人心茶会」として、現在に至るまでその活動は続いている。
3. 無相の自己とは、外における自己と他者、内における生死などのように人間が自ずから持ち合わせる差別を徹底的に否定しつくしたところに現われるものである。

参考文献

- 市川白弦(1968)「知識人と禪」『印度学仏教学研究』17(1), 87-90.
倉沢行洋、小池清廉(1957)「求道心—心茶会のあり方—」『心茶』1(3), 17-19.
ジェフ・ショア(1998)「夢想家抱石—久松真一のポストモダン世界と西洋における批判」『禅学研究』(76), 10-31.
久松真一(1994)『増補 久松真一著作集』第三巻, 法蔵館.
久松真一(1995)『増補 久松真一著作集』第四巻, 法蔵館.
久松真一(1995)『増補 久松真一著作集』第八巻, 法蔵館.
久松真一(1996)『増補 久松真一著作集』別巻, 法蔵館.
藤吉慈海(1977)「FAS 禅 その二」『印度学佛教学研究』26, 14-19.
藤吉慈海(1987)『禅者久松真一』法蔵館.
藤吉慈海・倉沢行洋編(1991)『増補版 真人 久松真一』春秋社.
柳田謙十郎(1967)「禅とその批判」柳田謙十郎、佐木秋夫編『現代日本宗教批判』創文社, 27-53.

おもち ほのか／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 比較社会文化学専攻

An Ethical Approach to Hisamatsu Shin'ichi: The Way of Tea as an Example
Honoka Omochi